

研究ノート

学内における基礎看護技術演習についての一考察

——教科書比較による全身清拭の検討——

馬醫世志子¹⁾・佐藤晶子¹⁾・城生弘美¹⁾

Investigation of Fundamental Nursing Skills Training at School

——Bibliographical Research on Complete Bed Bath——

Yoshiko BAI¹⁾, Teruko SATO¹⁾, Hiromi JONO¹⁾

キーワード：全身清拭、石けん清拭、教科書比較、プライバシー

I. はじめに

日常生活援助に関する基礎看護技術について、臨地実習に出た学生からはしばしば「学内で教わったこととは違う」との声を聞く。医療の発展に伴い、臨床現場で用いられる物品や実施される援助方法は日進月歩で変化している。コストパフォーマンスや業務の効率についても考慮する必要がある臨床現場と、学生の理解が得られやすいように、必要事項の原理原則をデフォルメした形で練習する学内演習とは、高橋が述べているように¹⁾乖離がみられるのである。演習・実習ともに授業時間数が減少している昨今、限られた時間内に実践力を身につけるには、基礎看護技術の物品・手順を細部にわたって内容を厳選することが必要である。

現段階では、基礎看護技術項目という大きな枠組みにおける研究はされているが、援助方法の細部にわたる具体的な内容や使用されている物品についての研究は未だみられない。臨床との乖離をどう教育すべきかを明確にし、学生の看護能力の向上を目指して、従来の基礎看護技術の教育内容を抜本的に見直すことが現段階での課題であると考えられる。

II. 研究目的

本研究では、従来の基礎看護技術の教育内容を見直すため、現在使用されている基礎看護技術の教科書を

対象に内容を比較する。また、第一段階として、臨床との乖離の現状を文献から抽出するため、現在の教育内容を示す教科書と臨床の一端を示す文献とを比較する。今回は様々な基礎看護技術の中でも、学生が臨地実習で経験する頻度の高い全身清拭に焦点をあて、教育内容を検討する資料を得ることを目的とする。

III. 研究方法

1. 対象の選択

データベース NACSIS Webcat で「図書」を対象に「基礎看護学」「基礎看護技術」をフリーワードとして検索した結果、16件の和図書が検出された。その中でまず、出版社、タイトルが同じもの上位3件を研究対象とした。次に、根拠に基づいた基礎看護技術を前面に出している最近の教科書2社²⁻⁶⁾のものを選択した。また、日本の看護技術のモデルとされている米国の教育機関で用いられている基礎看護技術の教科書の

表1 研究対象とした教科書の出版年と版数

| 教科書 | | 出版年・版数 |
|-----|-----|------------|
| 日 本 | A 社 | 2006年・第14版 |
| | B 社 | 2006年・第1版 |
| | C 社 | 2007年・第2版 |
| | D 社 | 2006年・第1版 |
| | E 社 | 2007年・第2版 |
| 米 国 | F 社 | 2006年・第6版 |
| | G 社 | 2007年・第7版 |

1) 群馬バース大学保健科学部看護学科基礎看護学講座

うち、広く教科書として採用されている2社^{7,8)}を今回は選択した。以上、日本の教科書5件と米国の教科書2件、合計7件の教科書を研究対象とした(表1)。

2. 研究方法

1) 比較項目の選定

本研究は学内における基礎看護技術演習の教育内容を検討するものであるため、初学者に対する演習としては、安全・安楽であり、重症度の比較的低い患者が満足できる全身清拭を行うことができれば十分であると考え。そこで、対象となった教科書のうち、以下の①～③の条件を満たす内容を抽出した。

- ① 患者が全身清拭に対して重視する項目
- ② 医療機器、カテーテル・ルート等
重症度の高い患者に関するものを除いた項目
- ③ 洗面、口腔ケア、陰部洗浄、手浴、足浴
スキンケアに関するものを除いた項目

①は、先行文献を参考に、「タオルの温度の適正さ」「陰部洗浄の温度の適正さ」「肌の露出度に対する配慮」「カーテンの閉まり具合への配慮」⁹⁾を挙げた。この中で「陰部洗浄の温度の適正さ」は除外項目に相当するため除外した。

次に、各教科書を熟読し、上記項目①～③に当てはまるものを抽出し、比較が容易に行えるよう、整理した。その結果、以下の項目を比較項目に決定した。

- ① 清拭方法：
清拭方法、湯・洗布の温度、洗布の種類、洗剤の種類、石けん分の拭き取り回数
- ② お湯の準備に使用する物品：
バケツ、ピッチャー、ベースン、温度計
- ③ プライバシーの保護方法

2) 一覧表の作成

各教科書における全身清拭についての記述を熟読し、選定した比較項目について、最多の記述に対応できる一覧表を作成し、記述内容を詳細に比較検討した。

3) 文献との比較

医学中央雑誌の検索サイトを活用し、「清拭」「清拭一全身」「清拭一熱布」「全身清拭」「熱布清拭」のシソーラス用語を用いて2003年から2007年までの5年間を対象に、原著論文かつ看護分野の文献を検索した。その中から上記で選定した比較項目に関する文献を抽出し、臨床現場と教科書の記載を比較検討した。

3. 用語の定義

1) 教科書

広辞苑によると「学習用教材として使用される図書」とされている。本研究では、教育機関で広く使用されている図書を「教科書」と定義した。

2) 洗布とウォッシュクロス

リーダーズ英和辞典によると、英語で“washcloth”とは洗面用タオルを意味するが、日本の看護界ではおしぼり程度の大きさの布をウォッシュクロスと呼ぶことが多い。本研究では、おしぼり程度の大きさの布を「ウォッシュクロス」とし、患者を洗う布を総称して「洗布」と定義した。

3) 温タオル

清拭車やタオルスチーマー、電子レンジ等で温めたタオルを「温タオル」と定義した。

4. 研究期間

2007年12月～2008年1月

IV. 結 果

1. 一覧表の作成

決定した比較項目に基づいて一覧表を作成した(表2、表3、表4)。

1) 清拭方法

お湯を用いた清拭方法である「お湯+洗布」に関しては全ての教科書に記載されていた。温タオルを用いた清拭方法である「清拭車」、電子レンジ等で温めて使用する使い捨てのウェットタオル「クレンジングパック」、ベッド上での温水シャワー「ボディウォッシャー」に関する記載はそれぞれ1社ずつであった。

バケツ内の湯の温度は「60°C以上」が1社、「55～60°C」が1社、「54°Cもしくは60°Cのお湯を用意し、後で水を足す」が1社で、2社で記載がみられなかった。ベースン内の湯の温度は、「実施者が手を入れられる最高温度」が2社、「快適な温かさ」が1社、2社で記載がみられなかった。「54°Cもしくは60°Cのお湯を用意し、後で水を足す」としたB社では、清拭の時間経過と湯温の関係を紹介し、「ウォッシュクロスが皮膚にあたるときの温度が40～42°C(温かいと感じる温度)であるためには、準備中の温度低下、ウォッシュクロスを経る際温度低下を考慮すると、用意する際には54°Cが適温であるとされる。」と根拠¹⁰⁾を示していた。また、バケツ内の湯の温度か、ベースン内の湯の温度か、

記載がみられなかったが、「実施者が手を入れられる最高温度」「温かい湯」との記載が各1社みられた。

皮膚に当たる洗布の温度は「40～45℃」が1社、「40～42℃」が1社、「45℃以下」が1社で記載がみられ、4社で記載がみられなかった。「45℃以下」としたD社では、根拠となる文献名は明示されていないが、「皮膚に分布する温線維は45℃にもっともよく反応し、それ以上の温度になると痛覚線維が反応するようになるため、皮膚に当たるウォッシュクロスは45℃以上にならないように注意する」と記されている⁶⁾。

洗布に関しては、「ウォッシュクロス」は全ての教科書で記載されていたが、「フェイスタオル」を用いて体を洗うことについて記載されている教科書は2社であった。洗剤に関しては、「石けん」は全ての教科書で記載されていたが、「泡沫剤」についての記載は2社であった。

石けん分の拭き取り回数は「3回以上」が2社、「2回以上」が1社、4社で記載がみられなかった。「3回

以上」とした2社では根拠となる文献が示されていた。B社では「皮膚に石けん分が多く残留していると、高齢者など皮膚のアルカリ性を中和する能力が低下している患者ではかぶれの原因となるので、すすいだウォッシュクロスによる拭き取りが3回以上必要である」¹¹⁾、D社では「拭き取りの回数が多くなるほど皮膚のpHは元の状態に近づくが、拭き取りよりも洗浄のほうがより効果的である」¹²⁾と記した上で文献名を明示していた⁶⁾。

2) お湯の準備に使用する物品

お湯の準備に使用する物品としては、バケツを「お湯用」「汚水用」に、ベースンを「石けん用」「すすぎ用」に、ピッチャーを「湯汲み用」「差し水用」に分け、温度計の記載がある教科書が2社、ベースンは「石けん用」か「すすぎ用」か不明であるものの、バケツ、ピッチャーの各2種、温度計の記載がある教科書が2社、そこから「差し水用」ピッチャーと温度計の記載を省いた教科書が1社あった。日本の5社全てが「お

表2 清拭方法に関する教科書比較

| 清拭方法 | | 日 本 | | | | | 米 国 | |
|-------------|-----------|---------------------|------------------|------|---|---------------------------------|------------------------------------|--------|
| | | A社 | B社 | C社 | D社 | E社 | F社 | G社 |
| 清拭方法 | お湯+洗布 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 清拭車 | — | — | — | — | ○ | — | — |
| | クレンジングバック | — | — | — | — | — | ○ | — |
| | ボディウォッシャー | — | — | ○ | — | — | — | — |
| 温 度 | バケツ内の湯 | 60℃以上 | 54℃もしくは 60℃+水 | — | 実施者が手を入れられる 最高温度 (バケツ内か ベースン内か の記載なし) | 55～60℃ | 温かい湯 (バケツ内か ベースン内か の記載なし) | — |
| | ベースン内の湯 | 実施者が手を入れられる 最高温度 | — | — | — | 実施者が手を入れられる 最高温度 (50～52℃) | — | 快適な温かさ |
| | 皮膚に当たる洗布 | 40～45℃ | 40～42℃ | — | 45℃以下 | — | — | — |
| 洗 布 | ウォッシュクロス | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | フェイスタオル | — | — | — | ○ | ○ | — | — |
| 洗 剤 | 石けん | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 泡沫剤 | ○*1 | — | ○ | — | — | — | — |
| 石けん分の拭き取り回数 | | — | 3回以上 | 2回以上 | 3回以上 | — | — | — |

*1：A社の教科書では、「泡沫剤は石けんより洗浄効果が劣り、長期運用は避ける」との但し書きあり。 ○=記載あり —=記載なし

表3 お湯の準備に使用する物品に関する教科書比較

| お湯の準備に使用する物品 | | 日 本 | | | | | 米 国 | |
|--------------|------|-----|----|-----|----|-----|-----|-----|
| | | A社 | B社 | C社 | D社 | E社 | F社 | G社 |
| バケツ | お湯用 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | — | — |
| | 汚水用 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | — | — |
| ベースン | 石けん用 | ○*1 | ○ | ○*1 | ○ | ○*1 | ○*1 | ○*1 |
| | すすぎ用 | — | ○ | — | ○ | — | — | — |
| ピッチャー | 湯汲み用 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | — | — |
| | 差し水用 | ○ | ○ | — | ○ | ○ | — | — |
| 温 度 計 | | ○ | ○ | — | ○ | ○ | — | — |

*1：用途・個数に関する記載なし ○=記載あり —=記載なし

表4 プライバシーの保護方法に関する教科書比較

| プライバシーの保護方法 | 日 本 | | | | | 米 国 | |
|---------------------|-----|----|----|----|----|-----|----|
| | A社 | B社 | C社 | D社 | E社 | F社 | G社 |
| ドア/カーテンを閉める | ○ | — | — | — | ○ | ○ | ○ |
| スクリーンを活用する | — | — | — | ○ | ○ | — | — |
| 「出入り禁」などの札 | ○ | — | — | — | — | — | — |
| 清拭部位以外は綿毛布とバスタオルで覆う | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 清拭部位も露出不要時は覆う | ○ | — | — | — | ○ | — | ○ |

○=記載あり —=記載なし

湯用」「汚水用」のバケツを用いており、ベースンは「石けん用」か「すすぎ用」か不明であるものの記載があるが、米国の教科書ではバケツ、ピッチャー、温度計に関する明確な記載はみられなかった。

3) プライバシーの保護方法

プライバシーの保護方法としては、「清拭部位以外は綿毛布とバスタオルで覆う」が全ての教科書で記載されていた。しかし、「清拭部位も露出不要時は覆う」は日本で2社、米国で1社のみ記載がみられた。「ドア/カーテンを閉める」は日本で2社、米国で2社記載がみられた。「スクリーンをする」は日本で2社、「出入り禁などの札」は日本で1社記載がみられたのみであった。

2. 米国の教科書について

米国の教科書は日本の教科書に比べて、お湯やウォッシュクロスの温度、石鹸の拭き取り回数等の詳細についてはあまり記載がみられなかった。しかし、どの時点でベッド柵をつけるか、感染予防のためのグローブはどの患者に対してつけるか等、安全に関する記載が多くみられた。

3. 文献との比較

医学中央雑誌で、「清拭」「清拭一全身」「清拭一熱布」「全身清拭」「熱布清拭」のシソーラス用語を用いて2003年から2007年までの5年間を対象に、原著論文かつ看護分野の文献を検索した結果、122件が検出できた。そのうち、選定した比較項目に関連すると思われる文献は14件あった。内訳は石けん清拭の効果や拭き取り回数等、石けん清拭に関するものが8件¹³⁻²⁰⁾、温タオルを運ぶ際の温度の低下や温タオル入れの細菌繁殖・異臭、患者にとって快適な温タオルの温度等、温タオルに関するものが5件²¹⁻²⁵⁾、清拭に用いるお湯の温度に関するものが1件²⁶⁾であった。

石けん清拭に関する文献では、石けん清拭は石けんを用いないお湯だけの清拭よりも、洗浄能力・爽快感

において効果的であるが、お湯だけの清拭よりも時間がかかるため、いかに効率的に行うかが課題であると述べているものが多くみられた。

お湯の温度については、看護学生を対象にした研究では「60°Cの湯が気持ち良いと感じる」という結果が出ていた。

清拭時のプライバシー保護に直接関連する文献はみられなかった。

V. 考 察

1. 「石けん+ウォッシュクロス+お湯」清拭と温タオル清拭

今回対象とした教科書では、日米問わず、「石けん+ウォッシュクロス+お湯」を用いた清拭が全ての教科書で記載されていたことから、この方法が現在の基礎看護技術教育でのスタンダードな教育内容であると考えられる。しかし、文献検索では温タオルに関する文献がみられ、臨床現場では温タオルの使用が特別なことではないと推測される。だが、教科書で温タオルを扱ったものは1社のみであり、米国のクレンジングパックを考慮しても2社のみである。温タオルによる清拭は、お湯の準備や石けんの拭き取りなどが簡略化される反面、温タオルの温度低下時の対処法や清拭車をいかに清潔に保つか等、新たに教育内容に含むべき項目があると考えられる。コストパフォーマンスを考慮しなければならない臨床現場では、必ずしも患者にとって最善の方法で清拭を行っているとは言えないが、臨床現場と教育現場での乖離を最小限に抑え、学生が臨機応変に臨床で清拭という看護技術を提供できるよう、教育内容の見直しが必要である。

2. 石けん清拭

上記で述べたように、石けん清拭は教科書ではスタンダードな方法であるが、文献検索では、慣れた臨床看護師でさえも時間がかかるため、効率的な石けん清

拭方法を模索している段階だと思われる。どの程度の割合で臨床現場が石けん清拭を行っているか、時間をかけてでも石けん清拭を行うことが本当に患者にとって効果的であるのか、お湯のみの清拭と石けん清拭にかかる時間の差はどの程度のものなのか、について調査し、学生の教育内容を検討することが必要である。その上で、どのような患者に対し、どの清拭方法を選択するかといった具体的な看護の視点を教育内容に取り入れていくことがより現実に即した柔軟性のある看護師を育てることにつながると考える。

3. お湯と温タオルの温度

教科書では、バケツに用意するお湯の温度は54°C～60°C、ベースンのお湯の温度は実施者が手を入れられる最高温度(50～52°C)、皮膚に当たる洗布の温度は40～45°Cの記載が多かった。初学者に対する基礎看護技術の演習としては、今後、根拠となる文献と臨床現場での実際を照らし合わせ、理想的な教育内容を検討していくことが必要である。

4. お湯の準備に使用する物品

教科書では、お湯の準備に使用する物品として、バケツ、ベースン、ピッチャー、温度計の記載が多くみられた。しかし、文献検索では温タオルを使用している施設が多くみられ、準備に使用する物品も変化していると考えられる。今後、清拭方法と合わせて、根拠となる文献と臨床現場での実際を考慮しつつ、教育内容を検討していくことが必要である。

5. プライバシーの保護

今回対象とした全ての教科書で「清拭部位以外は綿毛布とバスタオルで覆う」と記載されていたが、臨床実習に出た学生からは「綿毛布もバスタオルも何も使わず、覆いもされていなかった」という言葉を少なからず聞く。文献検索ではプライバシー保護に直接関連する文献はみられなかったが、清拭に対する患者満足度の中で患者が重視する項目に「肌の露出度に対する配慮」「カーテンの閉まり具合への配慮」が挙げられていたことから、今後、臨床現場の実態を踏まえて教育内容を検討する必要があると考えられる。

6. 日米教科書比較

今回、選択した教科書7冊のみでは日米の教科書を比較することは困難である。しかし、傾向として、日

本の教科書がお湯の温度等、快適さを重視するのに比べ、米国の教科書はベッド柵やグローブなど安全面を重視していた。これは国民が医療、看護に何を求めているかを表しているとも考えられ、興味深い結果となった。

VI. 結 論

1. 教科書では「石けん+ウォッシュクロス+お湯」を用いた清拭がスタンダードであるが、現場では「温タオル」を用いた清拭が普及していると考えられる。臨床での温タオル使用について詳細に調査し、温タオルを用いた清拭方法のポイントを教育内容に盛り込む必要がある。
2. 石けん清拭は慣れた臨床看護師でも実施に時間を要し、効率のよい石けん清拭の方法が模索されている段階である。臨床での石けん清拭の実施度、効果、効率的な実施方法を調査し、その上で教育内容を検討する必要がある。
3. バケツに用意するお湯の温度は54°C～60°C、ベースンのお湯の温度は実施者が手を入れられる最高温度(50～52°C)、皮膚に当たる洗布の温度は40～45°Cの記載が多かった。
4. お湯の準備に使用する物品として、教科書では、バケツ、ベースン、ピッチャー、温度計の記載が多くみられた。しかし、文献検索では温タオルを使用している施設が多くみられ、準備に使用する物品も変化していると考えられる。
5. 教科書に記載されているプライバシーの保護の方法が臨床現場ではとられていない可能性がある。臨床現場がどのような方法でプライバシーを保護しているのか調査し、臨床現場の実態を踏まえた教育内容を検討する必要がある。

VII. 本研究の限界

本研究は限られた教科書を対象とし、文献検索も医学中央雑誌のみの検索であったため、データ量としての限界がある。今後さらにデータ量を増やすと同時に、実際の臨床現場でのデータ収集が必要である。

参考・引用文献

- 1) 高橋清美・佐藤友美・加藤法子ら：看護基礎教育

- における看護技術教育に関する一考察。福岡県立大学看護学部紀要 3(1)：2005：p.39-46.
- 2) 有田清子・尾崎章子・岡本啓子ら著：系統看護学講座専門3 基礎看護学3 基礎看護技術II。医学書院、東京：2006：p.88-94.
 - 3) 深井喜代子編：新体系看護学18 基礎看護学③ 基礎看護技術。メヂカルフレンド社、東京：2006：p.273-279.
 - 4) 志白岐康子・松尾ミヨ子・習田明裕ら編：ナーシンググラフィカ18 基礎看護学基礎看護技術。メディカ出版、大阪：2007：p.218-220.
 - 5) 三上れつ・小松万喜子編：基礎看護学第2版 演習・実習に役立つ基礎看護技術根拠に基づいた実践をめざして。ヌーヴェルヒロカワ、東京：2007：p.141-146.
 - 6) 深井喜代子・前田ひとみ編：基礎看護学テキスト EBN志向の看護実践。南江堂、東京：2006：p.220-224.
 - 7) Perry A, Potter P, ed.: Clinical Nursing Skills & Techniques, Elsevier MOSBY, 2006：p.380-390.
 - 8) Ellis RJ, Bentz MP, ed.: Modules for Basic Nursing Skills, Lippincott Williams & Wilkins, 2007：p.97-104.
 - 9) 甲地泰子・蛭名奈津美・古沢りさ子ら：全身清拭に対する患者の満足度。市立三沢病院医誌 12(1)：2005：p.19-23.
 - 10) 深井喜代子：知っ得！納得！看護技術 清拭。看護学生 48(1)：2000：p.29.
 - 11) 山口瑞穂子・野村志保子・吉尾千世子ら：清拭における石けんの皮膚残留度の研究。順天堂医療短期大学紀要 1：1990：p.12-19.
 - 12) 安部テル子・西沢義子：清拭時の石けんの皮膚残留に関する検討。第12回日本看護学会集録 看護総合 (2)：1981：p.77-79.
 - 13) 真田瑞穂：泡立て清拭を用いた清拭の患者満足度と効果。臨床看護 33(10)：2007：p.1517-1522.
 - 14) 岡崎敦子・安藤 緑・内山道子ら：背部清拭時の蒸しタオルの厚さ及び泡立て石鹸の清拭用具を比較して。日本看護学会論文集 看護総合 (37)：2006：p.188-190.
 - 15) 月田佳寿美・竹田千佐子・長谷川智子ら：看護技術における清拭に関する基礎的研究 固形石鹸および沐浴剤の皮膚表面への影響に関する客観的・主観的評価。福井大学医学部研究雑誌 4(1-2)：2003：p.35-45.
 - 16) 谷澤智子・石塚香奈子・山本照美ら：石けん清拭の皮膚残留度における拭き取り回数分析 患者群と看護師群の比較。看護技術 51(4)：2005：p.332-334.
 - 17) 松田明子・笠城典子・深田美香ら：無作為割付による石鹸清拭直前の熱布加温が皮膚表面 pH および角質水分量に及ぼす影響に関する検討。米子医学雑誌 55(6)：2004：p.280-288.
 - 18) 深田美香・宮脇美保子・高橋弥生ら：石鹸清拭の効果的な方法に関する検討 石鹸の泡立てによる石鹸成分の除去効果について。日本看護研究学会雑誌 26(5)：2003：p.169-178.
 - 19) 月田佳寿美・宮崎徳子・長谷川智子ら：清拭における石鹸の使用法の違いによる皮膚表面への影響 皮膚表面解析、皮表角層水分量、皮膚表面の pH を指標として。福井医科大学研究雑誌 3(1-2)：2002：p.31-38.
 - 20) 百合純子・藤井徹也：洗浄を取り入れた清拭の効果について。看護研究 36(3)：2003：p.241-255.
 - 21) 今井理恵：清拭車で温めたタオルを発泡スチロール箱で運ぶ際の室温差による患者への使用許容範囲について。岐阜県立下呂温泉病院・健康医療フロンティアセンター年報 (33)：2006：p.83-86.
 - 22) 小野みどり・北野美帆・濱野千登世：清拭タオル入れの消毒方法の検証 発泡スチロールの箱を使用して。日本看護学会論文集 看護総合 (37)：2006：p.387-389.
 - 23) 今井理恵：清拭車で温めたタオルを発泡スチロール箱で運ぶ際の室温差による患者への使用許容範囲について。日本看護学会論文集 看護総合 (36)：2005：p.352-354.
 - 24) 佐々木真紀・川村春代・高松はるみら：寝たきり患者と歩行可能な患者との清拭タオルの快適温度の評価。十和田市立中央病院研究誌 18(1)：2005：p.41-43.
 - 25) 河津香織・白井由美：清拭車に青森ヒバ油を使用して。黒石病院医誌 10(1)：2004：p.68-70.
 - 26) 倉内敏江：気持ち良いと感じる清拭方法の検討 使用する湯の温度とタオルの含水量から。看護教育の研究 (18)：2002：p.231-232.